

特

集

バラ科果樹における胴枯細菌病の発生状況と防除対策

福島県におけるモモ胴枯細菌病の発生生態と発生軽減対策

福島県農業総合センター 果樹研究所 ^{くさ か べ} 日 下 部 ^{しょう} 翔 ^{へい} 平
福島県農業総合センター ^{みなみ} 南 ^{はる} 春 ^な 菜

はじめに

福島県における 2024 年産モモの栽培面積は 1,540 ha、収穫量は 29,100 t であり（農林水産統計情報, 2024）、本県の重要な園芸品目となっている。一方で、1990 年代から県北地域のモモ主産地を中心に、収穫後の 9～10 月ごろに幹から赤褐色の樹液を漏出した後、急速に樹が枯死する症状が報告され、モモの生産を脅かす症状として生産現場からは対策が求められてきた。当時は発生原因が不明であったため、モモ急性枯死症と呼ばれ生産者が未知の病害への感染を危惧していたが、近年の研究により、細菌である *Dickeya dadantii* により引き起こされることが報告され（OTA and FUKAWA, 2020）、モモ胴枯細菌病という名称が提唱されている。本稿では、モモ胴枯細菌病の発生生態や、これまでに取り組んできた本病の発生軽減対策の一部を紹介する。

I 発生生態

福島県における本病の病徴や、発生しやすい樹齢・圃場条件などについては、以下のとおりである。

1 病徴

本病の発生時期は主に収穫終了後の 9～10 月であるが、8 月や 11 月にも発生する年がある。樹幹や主枝から赤褐色の樹液が漏出し（図-1A, B, C）、数日のうちに葉がほとんど落葉し、急速に枯死する（図-1D）。赤褐色の樹液からは発酵臭（アルコール臭）がする。また、発生した樹の樹皮を剥ぐと内部に褐変が見られ、樹液同様に発酵臭がする。樹液や樹液が漏出した場所の樹皮からは、病原細菌である *D. dadantii* が検出される。

2 発生しやすい樹齢等

本病は、2～5 年生の若木での発生が多く見られ（図-

2）、10 年生以降の成木で発生することはまれである。また、本病は特定の品種に限らず、早生品種から晩生品種にかけて幅広い品種で見られており、品種間差は判然としていない。

3 発生しやすい圃場条件等

本病は水はけが悪く、かつ傾斜地になっている圃場での報告が多く、一見すると水はけの良いと思われる圃場でも、土を掘ると水が湧き出るような圃場では局地的に発生する。本病の発生は年次変動が大きく（図-3）、夏季が高温乾燥で推移し、9 月ごろから降雨日が増加する年は発生が多い傾向にある。

II 類似症状との見分け方

モモ胴枯細菌病と類似する症状として、病害ではモモ胴枯病、生理障害では凍害が挙げられる。

モモ胴枯病は糸状菌（*Leucostoma persoonii*）による病害で、剪定痕や日焼け痕等の傷口から病原菌が侵入することにより、樹勢が衰弱し、枯死に至る（図-4A）。感染した樹の樹皮下が褐変し、発酵臭（アルコール臭）を伴う点は類似するが、本病による樹勢衰弱が見られ始めるのは 5～6 月ごろであり、発生時期が異なる。また、赤褐色の樹液の漏出が見られない点、発生した樹の樹皮を観察すると鮫肌状の部分が見られ（図-4B）、この部位の樹皮を剥ぐと内部に多数の黒点（柄子殻）が観察される点で、モモ胴枯細菌病と区別できる。

凍害は、冬期間の寒気や低温等により樹幹に亀裂や壊死を生じる生理障害で、樹勢が徐々に衰弱して枯死に至る（図-5A）。2～6 年生の若木で発生が多い点は類似するが、本症による樹勢衰弱が見られ始めるのは開花期ごろであり、徐々に樹勢が衰弱して落花 30 日ごろ（5～6 月ごろ）に枯死する例が多く、発生時期と進展速度が異なる。また、赤褐色の樹液は漏出しない点、凍害の発生した樹の樹幹には亀裂が入っていることが多い点（図-5B）でも、モモ胴枯細菌病と区別できる。

Features of Bacterial Canker and Disease Control by Using Under-drain in Fukushima Prefecture. By Shohei KUSAKABE and Haruna MINAMI

（キーワード：福島県、モモ胴枯細菌病、発生生態、発生軽減対策）